

私の留学体験記

広島県立福山誠之館高等学校 2年 高垣 皓（たかがき こう）

留学期間 令和5年12月9日（土） ～ 12月23日（土）（15日間）

留学先 ①Oslo Handelsgymnasium 高校 ②Amalile Skram 高校
（ベルゲン・オスロ、ノルウェー）

私は、幼少期からユニセフの職員になりたいという夢をもっている。貧困や紛争地域の現状が特集される度、危険に脅かされる中、最前線で支援を続けるユニセフ職員の方々の姿に心を打たれ、ユニセフで働きたいと思うようになり、英語力を高めたいと思ったことが、私が留学しようと思ったきっかけだ。

渡航する前は、正直、不安よりも好奇心のほうが強く、特に強く不安に思っていたことは何もなかった。強いて挙げるならば、現地で友達ができるか、授業についていけるかなどが少し気がかりだった。留学中はホームステイ先に滞在した。自分の部屋には、ベッド、机、洗面台、バスルーム、サウナなどが配置されていた。滞在先での生活で印象に残っていることは、書道だ。日本の文化を代表するともいえる書道を披露した。ノルウェーの人々は書道のことは全く知らなかったのでも、上手く伝わるかどうかとても不安に思っていた。私は、「愛」という漢字を書いたのだが書き順を始め、力の入れ方、筆の持ち方など基本的なことを説明するのに苦戦した。日本人なら誰もが知っているものが通用しないことを当たり前ながら痛感した。そんな中私は知っている単語を何とか繋げながら説明したのだがファミリーの方は真摯に耳を傾けてくれ、家族全員書道にチャレンジすることに成功した。違う国同士の人が一緒に筆を持ち、一つの作品を仕上げるのができたことは決して忘れないだろう。国という壁を全く感じなかった瞬間だった。

高校の雰囲気は、全体としてとても賑やかだった印象がある。例えば、日本では、休み時間に校庭に出て遊ぶというよりかは、室内で勉強をしたり、友達と話したりする人の方が多いというイメージがあるだろう。ノルウェーでは、高校生でも校庭に出てスポーツを楽しむ人が多く、いつも誰かの歓声が聞こえていた。また、授業中の生徒の様子も日本とはかなり対照的で、ディスカッションやグループワークの時間が多く取られていたり、生徒の発言を主軸として進行する授業があったりしたため、受身の姿勢で授業に臨んでいる生徒は少なく、大半は能動的な態度で参加していた。日本では先生の話を一方向的に聞くいわゆる受動的な形が多い。生徒主体の授業は生徒の自主性をより高める。上手くいく自信がなくてもまずやってみる姿勢を全員から感じた。主体的に物事を考え、浮かんだアイデアを躊躇なく示す態度は、自分の行動力をより磨くことに繋がることを学べた。

留学を終えて、家族や友達の大きさを身にしみて感じた。留学中、言葉が通じないというどんなに辛い時でも、自分で解決しなければいけない状況下に置かれたとき、今まで当たり前だと思っていた家族や友達の存在や、彼らのサポートが、どれほど有難いことだったのかを再確認し、己の未熟さや自立できていないことを感じた。「自信」と「積極性」は本当に大切だ。とにかく主体的に取り組むことが留学を通して、語学とともに学べたことである。日本の授業でも主体的に自分の意見を発信することに努めようと思う。

